様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　２ 年　６ 月 ２１ 日現在

機関番号：６２６１８
研究種目：基盤研究(B)（一般）
研究期間：2016～2019
課題番号：１６Ｈ０３４３８

研究課題名（和文）文脈情報を用いた日本語学習者の文章理解過程の実証的研究

研究課題名（英文）Inference Use in Reading Comprehesion Processes among JSL Learners

研究代表者
石黒　圭（ISHIGURO, Kei）

大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・日本語教育研究領域・教授

研究者番号：４０３１３４４９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　13,700,000円

研究成果の概要（和文）：日本語学習者が文脈情報を用いて文章理解を行うさいの処理過程の姿とその困難点を明らかにするため、その理解過程について日本語学習者および日本語母語話者に対面調査を行い、収集した240名分のデータ（中国人学習者100名、ベトナム人学習者100名、日本語母語話者40名）をすべてWeb上に公開した。また、この240名分のデータの分析結果をまとめた11本の論文をまとめた書籍を刊行し、学術的に成果として発信した。さらに、読解教育に携わる現場の日本語教師との交流を深め、本科研をつうじて得られた成果が、授業中あるいは教材としてどのように生かせるのか、指導方法をともに検討し、それを教師指導書の形で出版した。

研究成果の学術的意義や社会的意義
文章理解では、語彙力・文法力の静的な知識があればよいというわけではない。語の意味を理解する場合は、語の形態的手がかりや構造的手がかり、文の内容的手がかりを働かせながら、当該の文脈に合った意味を選択している。また、照応関係や連接関係を理解する場合にも、文脈に合わせた特殊なストラテジーを使いながら意味を絞りこんでいる。本研究は、オンラインの処理過程で発揮される、こうした動的な理解能力を考察の対象とし、文脈情報をどのように用いて日本語学習者が理解（あるいは誤解）しているかを、学習者の母語への翻訳をとおして明らかにできたと考える。

研究成果の概要（英文）：This study is intended to clarify the process and difficulties in text understanding using contextual information by learners of Japanese. We conducted a face-to-face survey on both learners of Japanese and native speakers of Japanese to find the process of understanding, and released online the data collected from 240 people (100 Chinese learners of Japanese, 100 Vietnamese learners of Japanese, 40 native speakers of Japanese). We also published a collection of 11 papers summarizing the analysis on the data for these 240 people, and disseminated it as an academic finding. Furthermore, by deepening exchanges with teachers involved in reading comprehension education, we conducted a collaborative research on teaching methods based on how to apply the outcomes of this study to the classroom and teaching materials, and published the findings of the collaborative research as a teacher's guide.

研究分野：読解教育研究・作文教育研究

キーワード：語彙　文脈　推論　文章理解　読解教育　日本語教育　ボトムアップ処理　トップダウン処理

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属されます。

１．研究開始当初の背景

日本語教育におけるこれまでの読解困難点の研究は語彙と文法が中心で、相当の蓄積があり、一定の成果を上げてきた。語彙においては、未知語の意味推測や漢字語の意味連想などの研究が盛んであり、文法では、長い文構造の理解や省略された主語の復元などの研究が目立つ。学習者の理解困難点に適切に着眼したこうした先行研究は貴重なものである。

また、これに続く研究として、学習者の文章理解過程を探る研究や、文章を理解する上での困難点を解明する研究がいくつか行われてきた。語彙の理解困難点や理解過程については、小森他（2004）、山方（2008、2013）、オーリガ（2016）、藤原（2016，2017）、松下（2017）、谷内・小森（2017）などが、文構造の理解や文を超えた結束性の把握などは、市川（1993）、石黒（2008）、庵（2019）などが挙げられる。

しかし、日本語教育における読解研究はいまだに学習者の知識を問うものがその中心である。また、学習者の知識ではなく運用力を問うものであっても、とりあえず調査してみてそこから困難点を発見する仮説発見型の研究が主であり、事実の指摘にとどまっているのが現状である。文章理解というオンラインのプロセスにおいて、限られた時間のなかで、限られた脳内のリソースを使って瞬時に文章の内容を把握できるのはなぜか、反対に、どのような条件があると、把握がうまくいかなくなるのかを深く探求する、相当規模の仮説検証型の研究が不足している。とくに、学習者の運用面で重要な文章情報を生かした研究が少なく、その結果、学習者が文脈情報を的確に使えず、内容の絞り込みに失敗し、理解に支障を来たしている読解教育現場にたいし、改善提案を示せない状況が続いている。

２．研究の目的

そこで、本研究では文章理解における文脈情報の役割に注目し、日本語学習者が文脈情報を用いて文章理解を行うさいの処理過程の姿とその困難点を明らかにし、その成果を読解教育に生かすことを目的としている。読解教育では、語彙力・文法力が一般に重視されるが、それらは文章理解の必要条件にすぎない。語彙力・文法力を生かして読み取った文の意味を起点に、ⅰ)背景知識を活性化させる力、ⅱ)表現意図を読み解く力、ⅲ)文章展開を推論する力があって初めて、文章を十全に理解することが可能になる。本研究は、語彙力・文法力といった静的な知識ではなく、オンラインの処理過程で発揮されるⅰ～ⅲの動的な運用能力を考察の対象とし、その源泉となる文脈情報を学習者がどのように用いて理解（あるいは誤解）しているかを、日本語母語話者や学習者相互の比較のなかで明らかにすることを目指すものである。

オンラインの動的な処理過程である文脈情報を用いた理解を可視化することで、読み手の文章理解の実態を明らかにできる。また、そのデータをウェブ上に公開することにより、これまでの局所的語彙・文法アプローチとは異なる観点から、学習者の読解困難点の解決を目指す研究・教育に大きく貢献できる。さらに、母語話者との比較、母語の異なる学習者との比較、日本語能力の異なる学習者との比較、滞日経験のある（ない）学習者との比較を行うことで、学習者のどのような属性が理解や誤解に影響を与えるかの検証も可能になる。

３．研究の方法

3－1 研究の観点

申請者らはこれまでの授業の経験や学習者のプロトコル分析などをとおして、語彙や文法について一定の知識を備えている日本語学習者にとっての文章理解の大きな壁は、以下の２類８種ではないかという見通しを得た。それぞれについて、その内容を簡単に紹介する。

(1)文脈情報を用いた語彙の意味の絞り込み：背景知識と関連
①和語の処理、②カタカナ語の処理、③固有名詞の処理　④空間・数量の語の処理
(2)文脈情報を用いた展開の絞り込み：推論と関連
⑤接続詞の意識、⑥指示語の意識、⑦連体修飾節の意識　⑧語の連鎖の意識

まず、背景知識に関わる(1)「文脈情報を用いた語の意味の絞り込み」について考える。①「和語の処理」は、和語の多義動詞が対象となる。たとえば、「いただいたメールアドレスは念のため控えさせていただきますが、私から直接メールをお送りするのは控えるようにいたします」という文に接した場合、前後の言語文脈の情報から、前半の「控える」が記録に残すという意味で、後半の「控える」が配慮して見合わせるという意味で理解しなければならない。しかし、学習者にはそうした多義語の区別が難しい。

②「カタカナ語の処理」は、たとえば「ブラック」という語を見て、「ブラック・カラー」「ブラック・コーヒー」「ブラック・ジョーク」「ブラックバス」などのいずれを指しているか、復元する処理を指す。たとえば、「外食チェーンはブラックが多い」という文を読んだ場合、その文の連語情報から「ブラック」を「ブラック企業」として理解することになる。しかし、これらを学習者が理解する場合、日本語力や、社会・文化的背景への知識の不足によって異なる意味に解釈してしまうことが少なくない。

③「固有名詞の処理」は、人名・地名・社名などの固有名詞を普通名詞として誤解するときに起きる。申請者自身が出版した読解教材に「愛」と「真理」という姉妹が出てくる文章がある。ところが、これを授業で使用したところ、中国語話者を中心に「愛」と「真理」を普通名詞と誤

解し、混乱が起きることがわかった。しかも、こうした誤解は、日本に留学して間がない学習者に多く、滞日経験の短さによる背景知識の不足がこうした誤解につながる可能性が示唆される。

④「空間・数量の語の処理」は、たとえば、「手前」という位置が身振り手振りや場面をイメージする画像なしで、文脈情報のみでどこに存在するのかを判断するのは、日本語学習者にとって難しい。また、「若干名」といった数量の感覚は、母語話者でも言語化困難なものであり、学習者はそれを母語等の偏った感覚に依拠して判断している可能性も考えられる。

また、推論に関わる(2)「文脈情報を用いた展開の絞り込み」を考える。学習者の⑤「接続詞の意識」を見ていると不思議なことに気づく。母語話者は文頭の接続詞を見ると、先行文脈との関係で後続文脈がどのように展開されるのか、見当をつけるのが一般的である。ところが、学習者の場合は、接続詞の理解を一旦保留しておいて、後続文脈を読み、先行文脈と後続文脈の関係を理解してから、その関係を確認するように接続詞を読むことが少なくないようなのである。これは、オンラインのプロセスにおける読み方としては効率が悪いことになろう。

⑥「接続語の意識」においても、たとえば指示語「これ」が文脈において指示しているものが、先行文脈、後続文脈のいずれを指すか、またそれが指定指示なのか代行指示なのかについて、オンラインの理解過程で即座に判断することは難しい。それにより、誤読を引き起こす可能性はあると思われる。

日本語における⑦「連体修飾節の意識」は、文の中に埋め込まれている修飾の範囲を確定することは学習者にとって大変な困難点である。事実、申請者の経験からは連体修飾節の前後を何度も読み返して理解するといった傾向が見られた。

⑧「語の連鎖の意識」も、学習者の困難点である。上述の①から④の語彙の意味理解能力や⑤から⑦の構造の文章解析能力が備わっていたとしても、文章理解には文脈を用いた推測力、長文を読む際には学習者の母語・母文化の影響、学習者個人の物事を考える時の習慣などさまざまな要因が働くため、筆者の意図と異なって文章を読んでしまう危険性を孕んでいるであろう。

以上、本研究は、文脈情報を用いた 2 類 8 種の絞り込みがどのように行われているかについて、日本語母語話者との違いや、同じ学習者であっても母語による違い、さらには同じ母語であっても日本語能力や滞日経験の違いによってどれほど影響を受けるのか、その実態を仔細に観察・分析し、読解教育に役立てるものである。

3－2 調査対象者と調査方法

まず、本研究の調査対象者は、表 1 の通りである。中国国内の調査校は、黒竜江大学東語学院日本語学科、青島大学外国語学院日本言語文学科、天津外国語大学日本語学院で、ベトナム国内の調査校は、ダナン外国語大学日本語韓国語タイ語学部、フエ外国語学部日本語言語文化学部である。一方、日本への留学生は所属大学や学部はさまざまであるが、日本国内の大学学部に 1 年以上在籍している者である。日本語母語話者は、東京近郊の大学に在籍する学部生に調査を依頼した。(1)の語彙の調査においては、海外・日本国内を合わせて 180 名のデータを採用し、(2)およびアイ・トラッキング調査においては、日本国内にいる留学生と日本母語話者に対して行った。なお、このほか、上述の⑧「語の連鎖の意識」の調査は、例外として中国の中山大学外国語学院日本語学科の学部生 30 名に依頼した。また、日本語能力については J-CAT(https://j-cat.jalesa.org/)を利用して測定した。

【表 1　本研究の調査対象者一覧】

	グループ		学年	専攻	日本語能力	平均滞日経験	データ採用人数
語彙	中国人学習者	1 年次終了（中国）	1 年	日本語	中級 -184.1	0	20
		2 年次終了（中国）	2 年	日本語	中級後半 -223.3	0	20
		3 年次終了（中国）	3 年	日本語	中級後半 -248.4	0	20
		留学生（日本）	1～3 年	文系全般	上級前半 -275.7	2.8	20
	ベトナム人学習者	1 年次終了（ベトナム）	1 年	日本語	中級 -156.9	0	20

		2年次終了（ベトナム）	2年	日本語	中級 -181.5	0	20
		3年次終了（ベトナム）	3年	日本語	中級後半 -213.6	0	20
		留学生（日本）	1～3年	文系全般	中級後半 -245.3	3	20
	日本語母語話者		1～3年	文系全般	―	―	20
	合計						180
展開 アイ・トラッキング	中国人学習者	留学生（日本）	1～3年	文系全般	中級後半 -248.4	2.8	20
	ベトナム人学習者	留学生（日本）	1～3年	文系全般	中級後半 -245.3	3	20
	日本語母語話者		1～3年	文系全般	―	―	20
	合計						60

一方、本研究で用いた調査方法は、(a)口頭逐語訳法、(b)口頭問答法、(c)アイ・トラッキング法である。まず、(a)口頭逐語訳法は、文章を読みながら口頭で母語に翻訳してもらい、また、そこで考えている内容を母語で表現してもらうもので、訳読法と発話思考法を組み合わせた方法である。この方法では2類8種いずれも観察可能であるが、(1)文脈情報を用いた語の意味の絞り込み実態を知るのにとくに適しているため、語彙調査に利用した。

(b)口頭問答法は、文章を提示するさいに、対象となる絞り込みの問いも口頭で添え、その問いにその場で回答してもらう形式を取った。この方法も、2類8種いずれも観察可能であるが、とくに(2)文脈情報を用いた展開の絞り込みの実態を知るのに適しており、展開調査に利用した。

(c)アイ・トラッキング法は、口頭逐語訳法や口頭問答法と異なり、調査協力者に文章理解以外の負荷をかけない素の文章理解を知る方法である。高精度のアイ・トラッキング・システムを用いて視線の動きをとらえることで、学習者の文章理解の様子を物理的に観察することが可能となった。あいまいな表現を解釈するための文脈情報をテキストのどこから得ているかは、アイ・トラッキング・システムを用いて初めて明らかになる。なお、アイ・トラッキング・システムは申請者の所属先所有のものを用いた。事後には筆記再生法で理解内容を確認し、特徴的な視線の動きを見せた箇所はフォローアップ・インタビューでその動機と背景を把握した。

４．研究成果

4-1　オンライン上でのデータ公開

上述の手順で得られたデータを次の段階を経て、整理および整備を行った。

(1) 母語で録音した音声の母語での書き起こし
(2) 書き起こしした母語の文字化のダブルチェック
(3) 母語の文字化から日本語への翻訳・日本語母語話者の音声の書き起こし
(4) 翻訳および母語話者文字化のダブルチェック
(5) 全データの表記の統一および文字化のミスの確認
(6) 全データの調査協力者情報のID化と最終チェック
(7) 全データのアップロード

整備後のデータは現在、データベースとして国立国語研究所のホームページに公開されており、Excelファイル版およびCSVファイル版でのデータ処理可能な状態で公開している（「日本語学習者の文章理解過程データベース」https://l2-communication.ninjal.ac.jp/文章理解研究/）。これらのデータは、日本語学習者が文脈情報を用いて行う多義語の意味の絞り込み、指示語・接続詞による連接関係の絞り込みを行う様子を口頭で行った母語による説明を書き起こしたもの、およびそれを日本語に翻訳したものである。

4-2　書籍の刊行

これらのデータをもとに、本研究では 2 冊の書籍を刊行した。そのうち 1 冊目は上記のデータベースにもとづいて実証的に研究を行った論文集で、和語動詞、外来語、固有名詞、空間・数量表現、指示語、接続詞、連体修飾節、語の連鎖というそれぞれの観点から学習者の文章理解の様子をまとめた（石黒圭編 2020）。

その結果、上述の(1)文脈情報を用いた語彙の意味の絞り込みにかんして、全体的な傾向として、(a)学年が上がるごとに語彙の知識が増えていること、(b)とくに②カタカナ語と③固有名詞の知識において、海外学習者と留学生との間に差が見られたこと、(c)手がかりとして使っている推測能力は、①から④の語彙の種類によって異なるが、複数の手がかりを用いると、推測がより安定することが明らかになった。

一方、(2)文脈情報を用いた展開の絞り込みにおいては、 (d) 全体的な傾向として、アイ・トラッキング・データから、学習者は一度で文の構造を理解するのは難しく、文章を何度も往復して読み直しが行われていること、(e)⑤接続詞、⑥指示語、⑦連体修飾節ともに、学習者特有の理解困難点が見られることがわかった。また、⑧語の連鎖においては、(f)手がかりや既存の背景知識の活用が文章の理解に有効に作用すること、(g)深く語義を考えようとしない姿勢や、トップダウン処理のみの解釈を行うと、語義解釈の失敗を引き起こすことが明らかになった。以上の結果から、学習者の文章理解過程の一端を解明することができた。

さらに、本研究の結果から、もう 1 冊書籍を刊行した。読解教育に携わる現場の教師との交流を深め、本科研をつうじて得られた成果が、授業のなかで、あるいは教材としてどのように生かせるのか、その指導方法をともに検討し、それを教師指導書の形にまとめ、出版した（石黒圭編 2019）。

本書の構成として、第 1 部では誤読、語彙、学習者の母語に分けた個別指導の方法について、具体例を挙げながら述べ、第 2 部では、より具体的な教室活動に着目し、反転授業による読解、ピア・リーディング、多言語を母語とする学習者の読解、多読、ジグソー・リーディング、速読、批判的読解、学習者主体型の読解という多角的な実践授業における読解の指導方法について提案を行った。とくに、本研究の分析結果とかかわりが深いのは、第 1 部の内容で、「第 4 章　漢字圏の学習者の困難点とその指導法」、「第 5 章　ベトナム語母語話者のメリットをフルに発揮する指導法」には、本研究のデータが用いられ、読解において母語別につまずきやすい面、および、それにたいする指導方法などについて提案を行うことができた。

引用文献

庵功雄（2019）『日本語指示表現の文脈指示用法の研究』ひつじ書房.
石黒圭（2008）『日本語の文章理解過程における予測の形と機能』ひつじ書房.
石黒圭編（2019）『日本語教師のための実践・読解指導』くろしお出版.
石黒圭編（2020）『文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究―学習者の母語から捉えた日本語理解の姿―』ひつじ書房.
市川保子（1993）「外国人日本語学習者の予測能力と文法的知識」『筑波大学留学生教育センター日本語教育論集』10：pp.19-28.
小森和子・三國純子・近藤安月子（2004）「文章理解を促進する語彙知識の量的側面―既知語率の閾値探索の試み―」『日本語教育』120：pp.83-92.
藤原未雪（2016）「中国語を母語とする上級日本語学習者が学術論文を読むときの困難点―名詞の意味の誤った理解を中心に」『日本語／日本語教育研究』7：pp.165-180、ココ出版.
藤原未雪（2017）「上級日本語学習者による学術論文の読解における語義の解釈過程」『一橋大学国際教育センター紀要』8：pp.119-132.
ポクロフスカ・オーリガ(2016)「キーワードの読み誤りが文章理解に及ぼす影響―ウクライナ人初中級日本語学習者のケーススタディ―」『日本語／日本語教育研究』7：pp.149-164、ココ出版.
松下達彦（2017）「日本語読解テキストのリライトの重要性とアプローチ－語彙的要素を中心に－」『日本言語文化研究会論集』13：p.1-18.
谷内美智子・小森和子（2009）「第二言語の未知語の意味推測における文脈の効果―語彙的複合動詞を対象に―」『日本語教育』142：pp.113-122.
山方純子（2008）「日本語学習者のテクスト理解における未知語の意味推測：L2 知識と母語背景が及ぼす影響」『日本語教育』139：pp.42-51.
山方純子（2013）『第二言語読解における語彙推測―語彙知識、母語背景、及び、テクストのトピックへの馴染み深さが及ぼす影響』神田外語大学博士学位論文.

URL

日本語学習者のコミュニケーション研究<https://l2-communication.ninjal.ac.jp/>

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計5件（うち査読付論文　4件／うち国際共著　1件／うちオープンアクセス　2件）

１．著者名 石黒圭	４．巻 35
２．論文標題 文の理解における日本語学習者の多義語の意味把握の方法	５．発行年 2018年
３．雑誌名 アジア文化	６．最初と最後の頁 69-81
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 該当する

１．著者名 田中啓行・石黒圭	４．巻 13
２．論文標題 日本語学習者による文脈指示対象の特定―中国語・ベトナム語話者が使用するストラテジーの分析―	５．発行年 2019年
３．雑誌名 埼玉大学日本語教育センター紀要	６．最初と最後の頁 27-37
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

１．著者名 蒙ユン	４．巻 14
２．論文標題 文章理解過程における日本語学習者の固有名詞の意味理解―文脈的手がかりに着目して―	５．発行年 2018年
３．雑誌名 国立国語研究所論集	６．最初と最後の頁 125-143
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） 10.15084/00001416	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

１．著者名 野田尚史・小西円・桑原陽子・穴井宰子・中島晶子・村田裕美子	４．巻 21
２．論文標題 実生活に役立つ初級日本語読解教材の作成と試用	５．発行年 2016年
３．雑誌名 ヨーロッパ日本語教育	６．最初と最後の頁 44-62
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 有
オープンアクセス オープンアクセスとしている（また、その予定である）	国際共著 －

1．著者名 野田尚史	4．巻 －
2．論文標題 国立国語研究所の日本語教育研究―日本語学習者の読解のための文法を中心に―	5．発行年 2016年
3．雑誌名 国際シンポジウム「国際日本研究―対話，交流，ダイナミクス―」報告書	6．最初と最後の頁 87-91
掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子） なし	査読の有無 無
オープンアクセス オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難	国際共著 －

〔学会発表〕　計11件（うち招待講演　3件／うち国際学会　1件）

1．発表者名 石黒圭
2．発表標題 中国人日本語学習者の文章理解における意味推測のストラテジー―読解指導の改善方法を考える―
3．学会等名 第4回全国大学日本語専門教育改革及び発展シンポジウム（招待講演）（国際学会）
4．発表年 2018年

1．発表者名 石黒圭・烏日哲・劉金鳳・布施悠子
2．発表標題 文章理解過程における日本語学習者の多義語の意味把握―文脈的手がかりを用いて―
3．学会等名 日本語教育学会2017年度秋季大会（新潟・朱鷺メッセ）
4．発表年 2017年

1．発表者名 石黒圭
2．発表標題 読解における多義語理解のストラテジー―中国語母語話者を対象に―
3．学会等名 長春師範大学日本語学科主催講演会（中国・長春市）（招待講演）
4．発表年 2017年

１．発表者名 石黒圭
２．発表標題 日本語学習者の読解における語彙理解の困難点と推測ストラテジー
３．学会等名 平成29年度国立国語研究所日本語教師セミナー講演（ドイツ・ハンブルク市）
４．発表年 2018年

１．発表者名 石黒圭・井伊菜穂子・烏日哲・田中啓行・張秀娟
２．発表標題 日本語学習者はどのように文章を理解しているのか ―目の動きから見えてくるもの―
３．学会等名 国立国語研究所「学習者のコミュニケーション」プロジェクト主催シンポジウム（東京・立川市）
４．発表年 2018年

１．発表者名 石黒圭・烏日哲
２．発表標題 文脈情報を用いた日本語学習者の文章理解過程の分析
３．学会等名 国立国語研究所 日本語教育研究領域 合同研究発表会
４．発表年 2017年

１．発表者名 石黒圭
２．発表標題 文章理解において学習者は文脈情報をどう生かすか―中国語母語話者を対象にしたケーススタディ―
３．学会等名 日本台湾交流協会 2016年度第5回日本語教育研修会（台湾・台北／高雄）（招待講演）
４．発表年 2017年

１．発表者名 砂川有里子
２．発表標題 日本語母語話者の言語使用特性―学習者との比較から見えてくるもの
３．学会等名 国立国語研究所シンポジウム「コーパス理論の研究と課題」
４．発表年 2017年

１．発表者名 鈴木美加
２．発表標題 「JLPTUFSアカデミック日本語Can-doリスト」の紹介・開発の経緯：全体説明
３．学会等名 国際シンポジウム「『ＪＬＰＴＵＦＳアカデミック日本語Can-doリスト』の活用に向けて」
４．発表年 2017年

１．発表者名 鈴木美加・河内彩香
２．発表標題 「JLPTUFSアカデミック日本語Can-doリスト」の紹介・開発の経緯：技能別―読解
３．学会等名 国際シンポジウム「『ＪＬＰＴＵＦＳアカデミック日本語Can-doリスト』の活用に向けて」
４．発表年 2017年

１．発表者名 砂川有里子
２．発表標題 コーパスを活用した語彙の意味記述
３．学会等名 9th International Conference on Practical Linguistics of Japanese
４．発表年 2016年

〔図書〕　計2件

1．著者名 石黒圭編、井伊菜穂子、石黒圭、烏日哲、赫楊、Nguyen Thi Thanh Thuy、田中啓行、Dang Thai Quynh Chi、張秀娟、布施悠子、宮内拓也、蒙ユン、劉金鳳	4．発行年 2020年
2．出版社 ひつじ書房	5．総ページ数 260
3．書名 文脈情報を用いた文章理解過程の実証的研究―学習者の母語から捉えた日本語理解の姿―	

1．著者名 石黒圭編著、今村和宏・烏日哲・王麗莉・木谷直之・Nguyen Thi Thanh Thuy・熊田道子・胡方方・佐藤智照・朱桂栄・鈴木美加・砂川有里子・大工原勇人・Dang Thai Quynh Chi・野田尚史・藤原未雪・ポクロフスカ オーリガ・蒙ユン・簗島史恵・楊秀娥著	4．発行年 2019年
2．出版社 くろしお出版	5．総ページ数 248
3．書名 日本語教師のための実践・読解指導	

〔産業財産権〕

〔その他〕

日本語学習者のコミュニケーション研究
http://l2-communication.ninjal.ac.jp/

6．研究組織

	氏名 （ローマ字氏名） （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	野田　尚史 (NODA Hisashi) (20144545)	大学共同利用機関法人人間文化研究機構国立国語研究所・日本語教育研究領域・教授 (62618)	

６．研究組織（つづき）

	氏名 （研究者番号）	所属研究機関・部局・職 （機関番号）	備考
研究分担者	佐藤　智照 (SATO Tomoaki) (30804918)	島根大学・学術研究院教育研究推進学系・准教授 (15201)	
研究分担者	砂川　有里子 (SUNAKAWA Yuriko) (40179289)	筑波大学・人文社会系（名誉教授）・名誉教授 (12102)	
研究分担者	今村　和宏 (IMAMURA Kazuhiro) (80242361)	一橋大学・大学院経済学研究科・准教授 (12613)	
研究分担者	鈴木　美加 (SUZUKI Mika) (90226556)	東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・教授 (12603)	
研究分担者	五味　政信 (GOMI Masanobu) (00225674)	一橋大学・国際教育交流センター・名誉教授 (12613)	
研究分担者	木谷　直之 (KITANI Naoyuki) (30397103)	政策研究大学院大学・政策研究科・非常勤講師 (12703)	
研究分担者	藤村　知子 (FUJIMURA Tomoko) (20229040)	東京外国語大学・大学院国際日本学研究院・教授 (12603)	
研究分担者	簗島　史恵 (YANASHIMA Fumie) (40401723)	政策研究大学院大学・政策研究科・その他 (12703)	